

「よほど」の意味と用法

杉浦 滋子

キーワード: 「よほど」、コーパス、条件節、文法化、語彙化

要旨

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて副詞「よほど」の用例を分類し、用法間の関連を提示した。また、現代日本語の感覚では不自然と感じられる用例について、なぜ不自然なのか検討し、現代語では比較の用法を除いて未実現事態にしか用いられなくなっていることを示した。例外を示す多くの条件標識の中で、「ないかぎり」のみが形式的にも意味的にも肯定的な主節をもつことができることがわかった。

1. 先行研究

現代日本語では「よほど」「よっぽど」が副詞として、「よほどの」「よっぽどの」が連体詞として使われている。語源は「よきほど」で、かつては適当な時期、適当な加減、相当な程度の表現であり、江戸時代後期までは概ね既定の事態について用いられていた(山口 2006)。本稿では「よほど」「よっぽど」の現代語での意味と用法について、コーパスの実例をもとに考察する。以後、それぞれ個別に言及する際には〈よほど〉〈よっぽど〉と表記し、総合的に言及する際には「よほど」と表記することとする。⁽¹⁾

「よほど」についての先行研究、渡辺(1987)では、「～しようかと思っただがやめた」というタイプが成語的表現として例外である以外は「YはAである、あるいはYの方がXよりAである、という先行判断を承けて、YはむしろAでないとする判断(先行判断への反対意見)を、Xの方がYと比較にならぬほどA性において高い、という形で主張する時の、XのYへの落差の大きさを表す語」(p.47)とする。そして、「～しようかと思っただがやめた」以外の用法のモデルとして次のものを挙げている。それぞれのモデルにつき、渡辺の挙げている例をひとつずつ挙げる。なお、「～しようかと思っただがやめた」はモデル(三)とされている。

モデル(一) XはYよりよほどAだ。

(1) この本の方が あの本よりよほど面白い。

モデル(二) よほどAと見えてBだ。

(2) よほど苦しい仕事と見えて、みなすぐにやめて行く。

モデル(二') よほどAでないBでない。

(3) よほど急がないと間に合わない。

モデル(二'') よほどAならBであり得る。

(4) よほど急げば間に合うかも知れぬ。

渡辺によるとモデル(一)が基本であり⁽²⁾、(1)の場合には「あの本の方が面白い」または「あの本は面白い」という判断が先行する場合に用いられる。先行する判断が後者であれば、表現意図は「この本の面白さはあの本の面白さより上だ」ではなく、「あの本は全く面白くない」になるとする。また、(5)の場合には渡辺が指摘するとおり、「より若ければより若く見える」という常識があって用いられるものである。

(5) 姉さんの方が妹よりよほど若く見える。

モデル(二)は既実現の事態の認識から、その原因として常識の程度を超えたAがあったと推定する構文である。渡辺はモデル(二)は常識に対する反対意見を述べる用法とし、Bが既実現の事態であり、その原因として常識の程度を超えたAがある(あるいはあった)と推定する文になるとする。そして、Bが未実現の事実であればモデル(二')になるとする。モデル(二')では未実現の事実Bに関して「普通程度のAならばBでない」という常識的な判断を、「普通ではない程度のAでないならばBでない」という表現にしている。そして、(二'')は(二')と同じ内容を二重否定ではなく肯定の形式で表したものとする。

渡辺の分析は重要だが、次のような問題点もある。

- (a) 形式のモデルを提示しているため、その形式にあてはまらない「よほど」の用例をどう扱うか明確でない。
- (b) 次のような文を挙げ、かつては使われていたが現代語では非文法的なものとしている。そして、その理由として(1)が比較構文であるのに対して(6)が計量構文(比較せずに量を表現する構文)であるためとしている。しかし、実例を見ると、これ以外にも古風と思われる用法があるため、どのようなものが古風であるのか、より明確にする必要がある。

(6) この本はよほど面白い。

(c) モデル(二)、(二')、(二'')は、基本的にひとつのパターンの変異とされている。(二)ではBが既実現の事態であり、(二') (二'')ではBが未実現の事態という点が違っているが、同じパターンとしているわけである。しかし、Bが未実現か既実現かということは非常に大きな違いである。(二)では既実現事態を認識してそこから推量を行うが、

(二')には推量の要素はないので、意味の上で等価ではなく、同じパターンとすることに疑問がある。(二')と(二'')にはより共通点があるが、論理式に置き換えた時に等価であるように見えても言語表現として同じではありえないので、これらの違いをより詳細にとらえる必要がある。⁽³⁾

ほかに、小林(1992a)において次のような目的を表す形式が指摘されている。

(7) 正選手になる(ため)には、よほど練習しなければならない。

小林はこのパターンが(8)のように、モデル(二')の形式に言い換えられるとしている(言い換えられない場合についても言及している)。

(8) よほど練習しなければ、正選手にはなれない。

第二節ではコーパスに見られる形式について述べ、第三節では現代語では許容されない場合を検討する。第四節ではコーパスの実例の検討から、「よほど」が用いられる文脈の分類を提示し、第五節でそれぞれの用法にどのような形式が見られるか述べる。第六節では「よほど」を含む節の独立性の変化について、第七節では「よほど」と共起することの多い条件節標識、特に「ないかぎり」について述べる。

2. コーパスのデータ

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用い、検索サイト少納言で「書籍」「1986-2002年」の〈よほど〉765例、「1986-2003年」の〈よっぽど〉の用例264例を得た。⁽⁴⁾

まず、渡辺のモデルにあたる例、小林の目的の例をひとつずつ挙げる。(9a)はモデル(一)の例、(9b)はモデル(二)の例、(9c)はモデル(二')の例、(9d)はモデル(二'')の例、(9e)は目的の例である。

- (9) a. ところが今では、みかんなどは静岡の特産ではなくなってしまった。よその地域、和歌山や愛媛などの方が、よほど良質のみかんを産出するのである。
(望月照彦『都市民俗学』4 未来社 1990)
- b. そこへあたふたと、成田支配人がやってきた。よほど急いで来たとも見え、靴下にサンダルを履いている。(辻真先『犯人さん、復讐です！キャピキャピ探偵事件メニュー3』徳間書店 1988)
- c. とりあえず一人前の教師扱いされるようになってからも、よほど努力しないと新しい流れについていけないし、(下村哲夫『学校は変えられる』国土社 1989)

- d. それはそうと、少正子の容態はどうなのだね。よほどひどければ宮廷より医者遣わすこともあろう。(酒見賢一『陋巷に在り』7(医の巻)新潮社 2002)
- e. NHKが生きのびるにはよほど思い切った大変革が必要ですね。(田原総一郎『メディア王国の野望』文芸春秋 1995)

モデル(二)以外のものは「よほどの」と名詞を修飾する形でもあらわれる。以下にそのような例をひとつずつ挙げる。(10a)がモデル(一)の例、(10b)がモデル(二)の例、(10c)がモデル(二)の例、(10d)が目的の例である。

- (10) a. ユーザーの気持ちになりきって深く掘り下げて勉強する方がよほどの効果がある。(鎌田勝『鎌田勝の戦略的人材開発の考え方とその技法 困難な時代を勝ち抜くために』政経研究所 2002)
- b. 村松は、荒縄に手をかけた。彼女も、荒縄の結び目を解くのに手を貸したが、よほどの強い力で締めあげたものとみえ、容易なことでは結び目が解けない。(和久峻三『東京-バンコク生首殺人事件』1994)
- c. 数百万の選挙人を対象とする選挙運動には多額の費用を必要としてよほどの資産家でないと立候補できない、これではりっぱな人が選挙に出にくい、(天川晃『地方自治・司法改革』天川晃, 小田中聰樹 小学館 2001)
- d. 日本が名分を得るには、国際舞台でのよほどのスタンドプレイが必要となる。(西尾幹二『国民の歴史』(1)新しい歴史教科書を作る会編 産経新聞ニュースサービス 1999)

そして、先行研究で扱われていない次のタイプの形式が見られた。

(A) 述語が「よほど」「よほどのこと」である例

- (11) 「おとなしい民おばさんがおこるのだから、よほどのことだ。もういじめてはいけないよ」とかばってくれた(前掲文庫本P. 52)⁵⁾(荒川有史『母国語ノート』三省堂 1993)

(B) 「ならいざしらず」「ならともかく」「は別」「なら別」などを用いて例外であることを示す例

- (12) a. 職業に就いて、そこでしかるべき自己実現をするためには、男でも女でも全身全霊を打ちこむ必要があるのであって、よほど半ばな仕事ならいざしらず、自分以外の信頼できる女性の助けなくして、仕事と育児が両立するわけがない。(渡部昇一『努力しただいで知性は磨かれる』PHP 研究所 1999)

- b. 晴れた日ならたしかに見晴らしはいい。しかし、よほど低い山ならともかく、登山というほどの山の頂上にはほとんど草木がない。(高田宏『森が消えるとき』徳間書店 1991)
- c. あまり迷いすぎる人は弁護士に依頼すべきでないと思います。このような部類の人は、よほど気長な弁護士は別ですが、たいていの弁護士からきられてしまいます。(実著者不明『弁護士の上手な探し方・頼み方 安心して依頼でき・裁判に勝つための第一歩』自由国民社 2001)
- d. 日本人はそんなことはしない。まあよほどの中国かぶれなら別だらうけれど。(丸谷才一『男もの女もの』1998)

(C) 「なんて」「たら」「れば」の付く節を受けて話し手の判断を表す例

- (13) a. それに気がつかなかったなんて、おまえは、よっぽどのウストラトンカチだぜ。」(肥田美代子『ちょっと気になる転校生』ポプラ社 1986)
- b. 「一でも…だまされるとしたら、よっぽど鈍い先生だな…」(J・K・ローリング著 松岡佑子訳『ハリー・ポッターと秘密の部屋』静山社 2000)
- c. 一ふうん 一どういうのか、見てればわかるさ、わからなきゃ、おまえはよっぽど、ぼんくらのテングだぞ (木島始『ともかく道づれ』創風社 2002)

(D) 「よほど」が譲歩の条件文前件に現れる例

- (14) a. こんな時には、よっぽどしっかりした者でも、うろたえてしまいますからね」(江戸川乱歩『算盤が恋を語る話』東京創元社 1995⁽⁶⁾)
- b. 簡単な処置を施すことによって半永久的に光を保つそれは、よほどの富豪でも手に入らぬが、ここでは珍しくないらしかった。(三田誠『虎は歪める 精獣戦争』角川書店 2001)

(E) 疑問文

次のような、疑問文に現れる例も見られた。

- (15) a. 「私は、桐沢さんが無事に青森駅に着くところをどうしても見物したかっただけだ。それだけさ」「酔狂だな。それとも、青森にはよほど見る物がないのか」(風間一輝『男たちは北へ』早川書房 1989)
- b. なんというものにすがろうとしているのか、もし、そんな、界のちがうおばあちゃんたちが、自分のことを助けてくれる気があるのなら、とっくの昔に助け出してくれているはずなのだ。それなのに、思わずおばあちゃんの

名を口にしていた…。「よほど意気地なしなのか？ あのドウミーロックのパイロットは？」（富野由悠季『オーラバトラー戦記 11』角川書店 1992）

(F)事実と異なる認識

認識された事態が事実ではない場合に〈よっぽど〉が使われている例が2例あった。2例とも挙げる。

- (16) a. 一年や二年でやめられたら、なんにもならん。だからそこらへんは厳しくいつてきました。だからたまに一年足らずでやめた、なんて話を聞くと、よっぽど悪い事件みたいに、しばらくは職員室でも話題にのぼったものです。（笠井一子『棟梁を育てる高校 球磨工高伝統建築コースの14年』草思社 2003）
- b. 子どもはあんまり素直だから、自分はよっぽど性教育が上手だと勘違いしたくなるほどである。ところがこれが九歳や十歳にもなると、少し様子が変わってくる。（小貫大輔『十五歳の自分探し ブラジルから来た娘タイナ』小学館 2002）

得られた用例のうち、〈よほど〉61例、〈よっぽど〉13例を筆者の内省で古風と判断し、除外した。残った用例を、本稿では次のように分類することとした。先行研究で挙げられた分類との対応と、上で挙げた例をどこに分類するかを数とともに示す。

比較 二つの要素の比較で、主語となる要素に「よほど」が使われる	(一)	〈よほど〉 97 例
		〈よっぽど〉 116 例
推量 根拠が提示され、それにもとづいた推論に「よほど」が使われる	(二)	〈よほど〉 306 例
		〈よっぽど〉 86 例
例外 例外的事態に「よほど」が使われる。原則は成立する	(二) (二") 目的 (A)(B)(C)(E)	〈よほど〉 286 例
		〈よっぽど〉 41 例
心的事態と実際の事態の乖離 行為を行いたい気持ちがあったがしなかった、あるいは認識が実際と異なっていた	(三) (F)	〈よほど〉 8 例
		〈よっぽど〉 7 例
譲歩 例外的事態に「よほど」が使われる。実際の事態は原則（予想される事態）と異なる	(D)	〈よほど〉 7 例
		〈よっぽど〉 1 例

ここで、推量と例外への分類について述べておく。推量の例には、(9b)(10b)のように、

個別の既実現事態を根拠として述べるものが多いが、(17a)のように、一般論としての事態から推量するものもある。こういった例も推量の例とした。ちなみに、(17a)を個別の既実現事態からの推量として述べれば(17b)のようになる。

- (17) a. 人に弱みをつかれて不利になるようなことを相手が自分に語った場合は、よほど自分を信頼してくれているわけで、リレーションがついているサインである。(國分康孝『恋愛の心理』三笠書房 1992)
- b. 彼は不利になるようなことを私に語った。よほど私を信頼してくれているだろう。

それに対し、(18)のような例はある事態から別の事態を推量するというよりは、ある事態について話し手が判断しているので、推量ではなく例外に分類した。「グロスツさんはどうやって生き延びたのかという疑問をもたない人」について「歴史に鈍感なのだろう」と推量しているのではなく、「そのような人は歴史に鈍感だ」と判断しているのであり、上に挙げた(C)も同様である。

- (18) グロスツさんはどうやって生き延びたのだろう。ウィーンでこの疑問を持たない人は、よほど歴史に鈍感だ。(堀野収『ウィーン素描』JTB 出版事業 1997)

3. 現代語の感覚で許容されない例

この節では、現代語では許容されない例について述べる。コーパスの中で、筆者の内省により現代語で許容されないと判断した例は〈よほど〉61例、〈よっぽど〉13例があり、次のタイプが見られた。なお、この中には方言の影響を受けたものや擬古文として用いられたものが含まれる可能性がある。

3.1 程度・量を表す要素を修飾するが比較ではない例

渡辺が計量構文と呼ぶもので、比較ではなく、程度や数量について相当な程度であることを示す例が、〈よほど〉43例、〈よっぽど〉12例見られた。

- (19) a. よほど前のことですが、旧西鉄ライオンズが、九州の平和台球場を本拠にしていたところ、西鉄が敗けると地元のファンがよく荒れたものです。(斎藤良輔『しゃれの文化史 言語遊戯アナリシス』未来社 1989)
- b. この次女は、もともと、よほどの大食いなのである。上品ぶってパンと牛乳で軽くすましてはみたが、それでは足りない。足りるものではない。(太宰治『走れメロス』偕成社 2002⁽⁷⁾)

3.2 程度・量を表す例

程度や数量を表す要素を修飾するのではなく、程度や数量を表す例が〈よほど〉2例見られた（〈よっぽど〉については例がなかった）。

- (20) a. 「さうですか。川まではよほどありませうかねえ、」「えゝ、えゝ、河までは二千尺から六千尺あります。（宮沢賢治『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』鎌田東二 岩波書店 2001⁽⁸⁾）
- b. ぼくは、体が上流の方へ動いてゐるような気持ちになるのがいやなので、水を見ないで、向ふの雲の峰の上を通る黒い鳥を見てゐた。ところがそれからよほどたっても、魚は浮いて来なかった。（宮沢賢治『宮沢賢治全集』6 筑摩書房 1986⁽⁹⁾）

3.3 比較だが反対の先行判断がない例

次の例は形の上では比較だが、現代語では用いられない。その理由は、反対の先行判断がないからである。このような例が〈よほど〉1例見られた。（〈よっぽど〉では見られなかった。）

- (21) 王斉美の方がよほど年下であったから、師弟の礼をとっていたが、角先生の方はきさくに友人つきあいをしていた。（酒見賢一『後宮小説』新潮社 1989）

3.4 比較する対象が「の方が」「より」によって明示されない比較の例

次の例文は現代語としては違和感がある。文脈から、「京都」と「大阪」が比較されているのは明らかだが、「～の方が」「～より」という明示的な比較の形式を使っていないからと思われる。このような例が〈よほど〉9例、〈よっぽど〉1例見られた。

- (22) おっとりすました京都にくらべて、大坂は庶民の活発な息吹が充満する明るい町だ。よほど晋作の肌にあう。じっとしておれなかった。（古川薫『高杉晋作 走れ！若き獅子』小峰書店 2000）

3.5 未実現の事態であることの標識がない例

次の用例も現代語の感覚では不自然である。

- (23) 湾内には緑が美しいが、この島も農耕に適していない。母島は更に三十五キロ南方で、よほど天気の良い日に、雲海の上の長い大きな山脈のように見える。（阪田寛夫『ノンキが来た 詩人・画家宮崎丈二』新潮社 1989）

次のように変更すれば違和感がなくなる。これは、「なら」「は」によって未実現事態であることが明示されたためと考えられる。このような例は上の1例のみであった。

(23) 母島は、よほど天気の良い日なら、雲海の上の長い大きな山脈のように見える。

(23^o) 母島は、よほど天気の良い日には、雲海の上の長い大きな山脈のように見える。

3.6 判断の根拠となる命題が明示されない例

次の例文も不自然さを感じさせる。

(24) 山猫はおこっていました。「かま猫、きみはよほどのお人よしだ。あんな事務所やめてしまえ！」(鈴木俊介『賢治のトランク 猫の事務所・氷河ねずみの毛皮 アニメ版』宮沢賢治原作 角川書店 1996⁽¹⁰⁾)

これは、判断の根拠となる文が明示されないためである。(25)は自然であるので、判断は現代語では「～なんて」「～とは」「～なら」のように判断の根拠の明示が必要であることがわかる。このような例は上の例1例のみであった。

(25) 「かま猫、あんな目に会って黙っている {なんて/とは} きみはよほどのお人よしだ。」

3.7 行為未遂に「～ようかと思う」が用いられていない例

現代日本語の感覚では「よほど」を用いて行為をする気持ちが強くあったが行為をしなかったことを表す場合、渡辺のモデルにある「～ようかと思う」以外には不自然であるが、それ以外の形式がコーパスの中で〈よほど〉に4例(「ようとする」1例、「たい」2例、「ようかと迷う」1例)見られた。

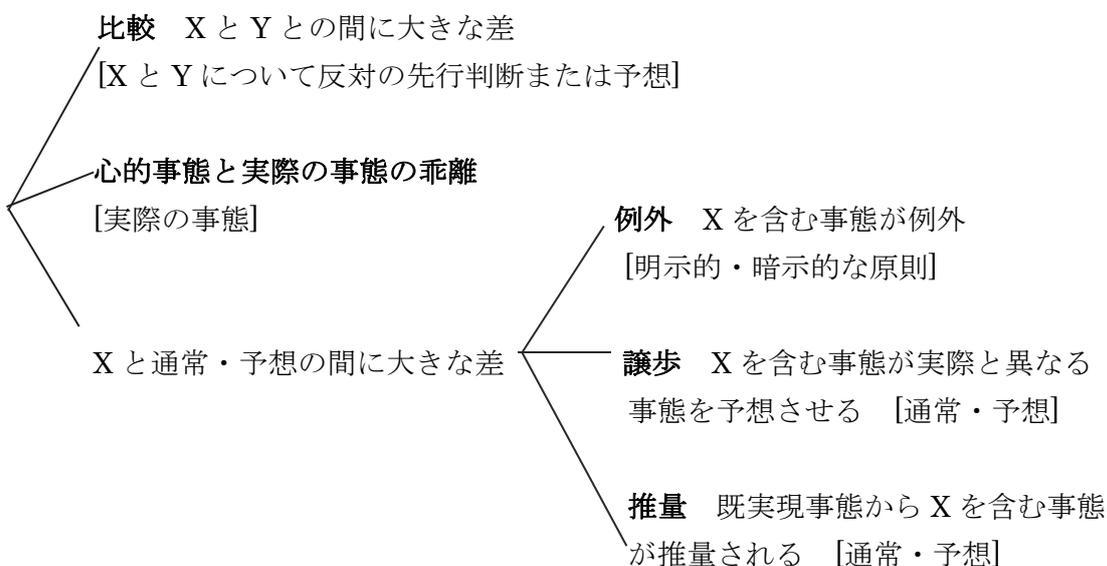
(26) 清河八郎の弟斎藤熊三郎が兄の仇として金子を狙い、兄の預け物など受取りに行ったとき、よほど刀を抜きかけようとしたが、金子のほうもそれと察したのか、壮士をかたわらにおいて顔色を変えて対応した。そのために金子を討つすきがなく、むなしく引きとった。(平尾道雄『維新暗殺秘録』河出書房新社 1990)

4. 「よほど」の用法間の関連

渡辺の定義にも「XのYへの落差の大きさを表す」という要素があり、これが現代の「よほど」の基本的な意味の一部であることは間違いなく、今回分析の対象としたコーパスの用例で現在では不自然と感じられる用例においてもみられる。しかし、それぞれの用法間の違いがあるのも明らかなことであるので、それら用法間が互いどのよう

に関連しているのか整理する。比較の用法においては、二つの要素に大きな差があることが表され、加えて、渡辺の指摘するように、反対の先行判断が存在する。他の用法においては、ある事態、もしくはある事態の中の要因が、予測される事態・通常の手態、もしくは予測される事態・通常の手態における要因と大きく差があることが共通している。渡辺(1987)は「反対」という用語を用いているが、ここでは「対比」と呼ぶこととする。例外の用法においては、実在するある事態について、それが予想される事態と大きく異なることが述べられる。心的事態と実際の事態の乖離の用法には行為未遂と事実と異なる認識が含まれる。前者では、主語の気持ちが、中立的な気持ちから、ある行為をとる方向へ大きく動いたことを述べ、後者では、認識と事実の間に大きな隔たりがある。譲歩の用法においては、ある要因が大きい値をとることである事態が成立しやすくなることが予想されるが、そのような、通常と大きく違う値をとっても予想される事態が成立しないことを述べる。推量の用法では、ある予想と違う事態が成立していることを受け、そのように予想と違う事態が成立しているのには、ある要因が予想と大きく違う値をとっているからと推量している。

これらの用法間の関連は次のように整理できる。[]の中に示したのは、対比される要素である。



どの用法においても、Xともうひとつの要素（個別の要素である場合と通常・予想である場合がある）の間に大きな差がある。また、比較を除くどの場合にも「よほど」を含む文が表す事態と反対、あるいは大きく異なる事態との対比で述べられている。その対比される事態は既実現である場合もある（心的事態と実際の事態の乖離の場合）し、未実現の場合もあるが、「よほど」を含む文の表す事態は、比較を除いてはすべて、未実現の手態（話し手の判断を含む）である。

5. それぞれの用法に用いられる形式

比較の場合には「～より」「～の方が」という、明示的な比較の形式が用いられることが必要となる。譲歩の場合、「～ても～」という形式が用いられる。行為未遂の場合は、「よほど～よう（か）と思う」という形式に加え、それが実現しないことが明らかでなくてはならない。実現しないことは(27)のように、言語表現以外で表現されることもありうる。

- (27) 「待たせたね」「よっぽど先に食べちゃおうかと思った」「そんなに腹が減ってるのかい？」(船戸与一『血と夢』徳間書店 2001)

例外と推量についてはより詳しく述べて行きたい。まず例外であるが、上の表に示したように、例外と分類される用例は〈よほど〉286例、〈よっぽど〉41例が見られた。例外の用法の中で、(i)「よほど」が述語に現れて事態が例外的であることを示す場合(上記A)〈よほど〉25例〈よっぽど〉13例、(ii)目的のためにある例外的事態が成立しなければならないと述べる場合が〈よほど〉11例〈よっぽど〉0例、(iii)「よほど」が従属節に現れて例外として示される例が〈よほど〉250例〈よっぽど〉28例である。(iii)において、従属節で例外として示す形式は「ないかぎり」「ないと」「なければ」「なくては」のように、否定の形式と条件節前件であることを表す標識の組み合わせが〈よほど〉226例〈よっぽど〉23例だった。これらの用例では渡辺のモデル(二)のように後件が否定文で現れることが多いが、次のように肯定文もありうる。

- (28) ここではよほど気をつけないと、爆発にまきこまれ、死んでしまう。(実著者不明『スペランカー完全攻略本』ファミリーコンピュータマガジン編集部|編著 1986)

しかし、(28)の後件は形式の上では否定ではないが、意味の上では否定的である。そこで、主な従属節の形式について、主節がどのようなものか調べた。それぞれの形式について後件が肯定文か否定文か、そして肯定文であっても否定的な意味をもっているかを主な形式について調べたところ、次のようであった。形式によって差があり、「ないかぎり」で否定的意味をもたない肯定が見られるが、ほかの形式においてはほぼすべてが否定あるいは否定的意味をもったものである。

	〈よほど〉	〈よっぽど〉
ないかぎり	否定 53 例 肯定 (否定的意味) 20 例 肯定 (それ以外) 39 例	否定 5 例 肯定 (否定的意味) 0 例 肯定 (それ以外) 3 例
ないと	否定 31 例 肯定 (否定的意味) 20 例 肯定 (それ以外) 0 例	否定 6 例 肯定 (否定的意味) 1 例 肯定 (それ以外) 0 例
なくては	否定 5 例 肯定 (否定的意味) 0 例 肯定 (それ以外) 0 例	否定 1 例 肯定 (否定的意味) 1 例 肯定 (それ以外) 0 例
なければ	否定 42 例 肯定 (否定的意味) 9 例 肯定 (それ以外) 1 例	否定 5 例 肯定 (否定的意味) 1 例 肯定 (それ以外) 0 例

「ないかぎり」が用いられ、主節が形式の上でも意味の上でも肯定的な例を挙げる。

- (29) a. 採点の厳しいことで知られるあるスポーツ紙の調教欄でも、エンペラーはよほどのことがない限り「A」の評価をもらっていた。(羽場たか子『優駿譜ターフを駆けぬけた個性派たち』朝日ソノラマ 1992)
- b. 一般に、前輪が外側へすべったときは、よほどボンヤリしていない限りドライバーはすぐに気がつく。(実著者不明『クルマ選び意外な盲点』ベストカー編 三推社 2001)

次に推量について述べる。推量の場合には、その根拠となる事態が前、または後で示される。推量の形式としては「と見える」に加え、よく知られている「らしい」「にちがいない」「ようだ」「のだろう」「のかもしれない」、さらに「のだ(ね)」、「のか」、「と思う」、疑問文なども見られる。(10b)は根拠が後に続き「と見える」が用いられた例であるが、根拠となる事態が前に現れる例を(30)に、後ろに現れる例を(31)に追加して挙げる。

- (30) a. 師の宮の唇も切れて、血がこびりついている。こめかみのあたりも、どす青くなっていて、よほど強く殴られたらしい。(氷室冴子『なんて素敵にジャパネスク』集英社 1991)
- b. ずっと温和な小千葉であったが、梅太郎の言葉をきくとさすがに顔色が変わってしまった。よほど怒ったのに違いない。(山岡荘八『坂本竜馬 1』講談社 1986)

- c. それでも牧子は、慶子の体にしがみついて、泣きじゃくった。よほど怖かったのであろう。(門田泰明『愛憎のメス』講談社 1987)
 - d. 鈴木は、どうしたことか怒りに震える顔を崩さない。よほど腹に据えかねることがあったようだ。(島田荘司『龍臥亭事件』上 光文社 1999)
 - e. 大石は副将格の家来二人と茶碗を回して薄茶のがぶ飲み。焼米を喰いすぎてよほど咽喉が乾いていたのでしょう。(井上ひさし『伊ヌの仇討』文芸春秋 1988)
 - f. (それにしても、あの自信はどこから来ているのだろう?—) 山際は彼の言葉どおり、犯人なんかではないか、それとも、よほど完璧なアリバイでもあるのかもしれない。(内田康夫『御堂筋殺人事件』講談社 1998)
 - g. 十九世紀末に私財を投じて自分の天文台を作ってね、一生懸命、火星の観測をしたそうだ」「よほど火星に引かれていたのね」(野本陽代『あなたも宇宙人』筑摩書房 1990)
 - h. やっと松葉杖にすがって帰宅したというから、医療技術の未発達だった五十年前とはいえよほどの重症だったと思われる。(上坂冬子『生き残った人と』上 文芸春秋 1992)
- (31)
- a. 表装の制作に関する参考書は、最近書店で多く見掛けるようになったが、よほど専門的な分類があるらしく、製法にしろ、様式にしろ、解説に可成り相違が感ぜられる。(斎藤南北『水墨画の描法』第2巻 秀作社出版 1989)
 - b. 今夜は大風が吹いていた。気温も結氷点よりよほどひくかったにちがいない。なぜなら、たらいにいれた水がすぐに氷のかたまりに変わったからだった。(チャールズ・ロバート・ダーウィン(著)/ 荒俣宏(訳)『ダーウィン先生地球航海記』第4巻平凡社 1996)
 - c. 土宜のフランスに対する印象はよほど深かったようで、この後パリに戻ってから、熊楠宛の書簡のなかでさかんに彼の消息を尋ねている。(松居竜五『達人たちの大英博物館』講談社 1996)
 - d. 「えっ! …」よほど意外だったのだろう。香代子は愕然として浅見の顔を見つめた。(内田康夫『はちまん』下 角川書店 2001)
 - e. 同時に、足下に転がっている真紅のポンプスが目に飛び込んでくる。よほど慌てて部屋へ入ったのか、ひどく乱雑に脱ぎすてられている。(原田宗典『優しくって少しばか』集英社 1986)

推量の主な形式は次のように調査対象範囲に現れた。「ね」「な」という口語的終助詞は〈よほど〉より〈よっぽど〉と多く共起するという傾向が見られる。

	〈よほど〉	〈よっぽど〉
と見える	22例	4例
にちがいない	31例	2例
のか	40例	13例
のだろう・のでしょう	63例	14例
ようだ	8例	2例
らしい	47例	5例
のだな・のだね・のね	15例	17例
の दौरानな・の दौरानね	6例	10例

6. 節の独立性

小林(1992a,b)は副詞「よほど」のほかに「よくよく」などの副詞を検討し、副詞を含む節が他の節を前提としている場合を連節性をもつと表現し、連節性をもつものの例として条件文の前件と後件を挙げている。しかし、「前提とする」のが統語的な関係なのか意味的な関係なのか明確でない。意味の上で「よほど」を含む節と関係のある節には、「よほど」を含む節の表す事態と対比される事態を表す節のほか、推量の根拠を表す節、「よほど」を含む節の表す事態から導き出される事態を表す節、目的を表す節が存在する。これらにおいて、「よほど」を含む節ともうひとつの節との統語的な関係は一樣ではない。条件節前件であれば、統語的に後件が要求されるが、その他のものについては二つの節の関係は異なる。推量においては、「よほど」を含む節には原則的に推量の形式が現れるが、もちろん推量の形式は他の節との関係を示すものではない。そのため、他の節との結びつきは「よほど」によって生じていると考えられるかもしれない。しかし、「よほど」を含まなくとも、これら推量の形式はある根拠をもとに推論がなされていることを表している。

(32) 雨が降ったの दौरान / 雨が降ったに違いない / 雨が降ったのかもしれない。

そして、用例の中には、次のように推量の形式を含む文が句点でなく読点で根拠へと続くものも見られる。これは音声言語において、推量の形式を含む文が独立した文としての文末イントネーションをもたずに次の文へと続くことを反映していると思われ、根拠に先行する推量を表す文が独立した文からやや従属的な地位に移行していることを示す。⁽¹¹⁾

(33) いつもは優しい顔付きの人なのに、そのときの小父さんは鬼のような形相だった。私はその顔を今でも覚えている。よほど急いでいたの दौरान、小父さんは走りながら消防団のはっぴの袖に手を差し入れていた。(寄嶋豊『おんびんさく

で、どんつくで』文芸社 2001)

つまり、「よほど」を含む節が他の節とのつながりを持っていても、そのつながりの強さには段階があるのである。比較は除くが、今では古風と感じられる計量構文を含めてより独立性の強いものを左に、より従属性の強いものを右に図式化すると次のようになる。個別事態についての推量の方が一般事態についての推量より左にあるが、これは前者であれば統語的には独立だが、後者では(17a)の「～場合」のように、より従属性の高い形で現れるからである。

(34) [計量構文] > 事態について例外的という判断 (例外(i)) > 個別事態についての推量 > 心的事態と実際の事態の乖離 > 一般事態についての推量 > 例外(ii) > 例外(iii)、譲歩

山口(2006)が示すように、また本稿でも古風とした用例からもわかるように、〈よほど〉〈よほど〉という形式が成立してからも他の節を前提としない独立文で用いられていたが、現在はより独立性の低い節でのみ用いられている。文法化という観点から見ると、「よほど」という形式自体ではなく、「よほど」という形式が現れる節が、他の節への依存度を増すという形でより文法機能を担う方向に変化していつていることになる。上の図式は形式面での従属性についてのものだが、また別の次元で、対比される事態の有無という点でも変化があった。渡辺が計量構文と呼ぶのは、比較をすることなく程度を表す構文という意味であるが、山口(2006)は「相当な程度」を表すものには、極端に高い場合に比べて相当な程度を表現するものと、高い場合と低い場合の中間的な程度を表現するものがあると述べる。これは、「よきほど」という元の形式の意味に近い。そうであれば、「よほど」を使って単に相当な程度と述べているのではなく、ほかの事態との対比が存在することになる。現代語でこの意味はすでにないが、比較を除く用法でほかの事態との対比で用いられる点はこの古い用法と同じである。さらに、もともと既実現事態に用いられていたものが、比較の用法を除いて用いられない方向へと変化したという点も重要である。

7. 条件節標識「ないかぎり」

「よほど」の例外の用法では否定と条件の形式との共起が多く見られ、また「ないかぎり」が他の形式と違う特徴を見せた。日本語の条件節の標識は数が多いことがよく知られており、数多の研究があるが、条件の形式としての「(ない) かぎり」についての言及はそれほど多くない(中山 2004、北澤 2001)。しかし、「よほど」との共起では最も多く、また後件が形式的にも意味的にも肯定的でありうるという、他の条件節の標識と異なる性質をもっている。そこで、「ないかぎり」とその他の標識について考察する。

よく知られているように、日本語の条件表現には、実現した事態について使用できるものがある。「と」「たら」の例を挙げる。

- (35) a. 改札を出ると、目の前に駅ビルが見えた。
 b. 改札を出たら、目の前に駅ビルが見えた。

中山(2004)、北澤(2001)の指摘するように、「ないかぎり」も同様に、実現した事態にも用いることができる。次の例は作例だが、(36a)は前件が実現した事態、(36b)は前件が未実現の事態の場合である。((36a)においては前件と後件の間に読点を用い、(36b)においては用いていないが、それは内省にもとづく音声上の違いを反映させている。(ただし、音声上の違いはポーズよりイントネーションの違いであるように思われる)。

- (36) a. 向こうが譲歩して来ないかぎり、取引は中止だ。
 b. 向こうが譲歩して来ないかぎり取引は中止だ。

ここで、否定極性項目との共起を見ると、前件が実現した事態の場合には共起が可能だが、未実現事態の場合には不可能である。

- (37) a. 向こうが一步も譲歩して来ないかぎり、取引は中止だ。
 b.*向こうが一步も譲歩して来ないかぎり取引は中止だ。

「ないかぎり」に(37a)の環境では否定極性項目「一步も」が許容されるが、(37b)の環境ではされない。否定極性項目が統語的な否定によって認可されると考えるならば、前者の「ない」は統語的な否定であり、後者の「ない」はそうではないということになる。とすると、「ないかぎり」に仮定的用法と事実的用法があると考えのではなく、一語となった(36b)の「ないかぎり」と、統語的な否定と「かぎり」の二つの部分から成る(36a)の「ないかぎり」の二つがあると考えるのが妥当である。⁽¹²⁾ 加えて、「少しは」は(38a)で見ると、肯定の文脈でしか用いられない肯定極性項目と共起する(38b)の場合は、未実現の事態としての解釈しかない。これも未実現事態と共起する「ないかぎり」が統語的な否定を含まない語彙化した一要素であることを示す。

- (38) a. 少しは譲歩した。／*少しは譲歩しなかった。
 b. 向こうが少しは譲歩して来ないかぎり取引は中止だ。

なお、今回調査した用例での「ないかぎり」はすべて一語化したものであったし、次の作例で前件が既実現事態という解釈がないことから、一語化していない「ないかぎ

り」と「よほど」が共起しないことがわかる。

(39) *よほど譲歩して来ないかぎり、取引は中止だ。

ほかの条件形式に目を向けると、いずれも否定極性項目とは共起せず、肯定極性項目とは共起するので、否定は統語的否定ではなく、否定と従属節の標識がひとつの語彙項目として語彙化していることがわかる。

- (40) a. *一步も譲歩してくれないと取引は決裂してしまう。
b. *一步も譲歩してくれなくてはうまく行かない。
c. *一步も譲歩してくれなければ取引は決裂してしまう。
- (41) a. 少しは譲歩してくれないと取引は決裂してしまう。
b. 少しは譲歩してくれなくてはうまく行かない。
c. 少しは譲歩してくれなければ取引は決裂してしまう。

しかし、これらの後件は形式面で、あるいは意味的に否定的だが、「ないかぎり」は後件に形式面でも意味的にも肯定的なものがあるという点で違いがある。この違いをどのように捉えるべきかは、今後の課題として残る。

8. 結語

本稿では「よほど」が副詞として、そして量を表す名詞として既実現事態、未実現事態のどちらにも使用できていたが、現代においては量を表す名詞としては用いられないこと、そして比較を除いては既実現事態については用いられないことをコーパスの分析で確認した。通時的には、自立した節において使われていたが、より従属性の高い節において使われるようになるという統語上の変化と、過度でない相当程度の表現から例外的に高い程度の表現という意味上の変化があったと思われる。また、「よほど」と共起する「ないかぎり」「ないと」「なくては」「なければ」が一語化していると主張した。「よほど」との共起が最も多かった「ないかぎり」は、後件が形式面でも意味的にも肯定的でありうる点で他の標識と違いがあることは確認できたが、その違いをどのようにとらえ、説明するかは今後の課題として残った。

[注]

- (1) 『日葡辞書』に〈よっぽど〉は登録されているが〈よほど〉が登録されていないことから、山口(2006)は〈よっぽど〉が先に成立し、促音が「表情音的なものして」落とされた可能性を述べているが、〈よほど〉が〈よっぽど〉とは別に「よし」の語幹を前項とする複合語として成立した可能性もあるとする。

- (2)同様の感覚を持つ現代語の話者が多いと思われるが、山口(2006)によると比較の用法が出現したのは江戸時代後期という遅い時期である。
- (3)論理学上の条件節と自然言語の条件節の違いとして、自然言語の条件節の一部で誘導推論が見られることがよく知られている。誘導推論とは、「PならばQ」という条件文から、論理的に導き出されない「PでないならQでない」という推論が働くことである。例として、「雨が降ったら試合は中止だ。」という自然言語の文から、自然言語の話者は「雨が降らなければ試合は中止されない」という意味も読み取る。しかし、(二')「よほどAでないとBでない」から誘導推論があるとすれば「よほどAならBだ」が成立するはずだが、(二'')は「よほどAならBであり得る」であるので、誘導推論は働いていない。「よほど」と多く共起する「ないかぎり」に対応する英語 *unless* について誘導推論が働かないことが Declerck and Reed(2000)に指摘されている。
- (4)「よほど」の用例5例について文中に用いられたものでないため対象から外した。また、コーパスで挙げられている年代は出版年であり、初版年ではない。一部用例については初版年を注に記す。
- (5)言及されている書籍は林郁『満州・その幻の国ゆえに』筑摩書房1983年。
- (6)初出は1925年。
- (7)初出は1940年。
- (8)1924-1931年頃の執筆とされる。
- (9)作品は宮沢賢治「さいかち淵」で、1923年頃の執筆とされる。
- (10)作品は「猫の事務所」で、1926年に発表された。
- (11)英語、中国語では形式上の独立文がイントネーションのみで条件節前件であることが示されることがある。
- (12)英語では、「ないかぎり」に対応する *unless* という一語が存在する。また、英語の *unless* も否定極性項目と共起せず、肯定極性項目と共起する(Declerck and Reed 2000)。

参考文献

- 赤塚紀子・坪本篤郎(1998)『モダリティと発話行為』日英語比較選書3 研究社出版
- 北澤尚(2001)「条件表現形式「限り」の文法記述」『東京学芸大学紀要』2 人文科学 52
 [再録 論説資料保存会(編)『日本語学論説資料』CD-ROM版 38号第2分冊増刊 2001年]
- 小林可奈子(1992a)『『よほど』『よくよく』の意味分析』『鹿児島短期大学研究紀要 50』
 [再録 論説資料保存会(編)『日本語学論説資料』29号 第4分冊 1992年]
- (1992b)「二つの節を前提とする副詞の意味分析について —『あまり』『よほど』『いったん』を例として—」『都大論究』29号 東京都立大学国語国文学

- 会[再録 論説資料保存会（編）『日本語学論説資料』29号 第4分冊 1992年]
中山英治(2004)「現代日本語における非現実的な意味領域 —ナイ限り、タリ、タトエ
バを対象にして—」『京都外国語大学 無差 10』[再録 論説資料保存会（編）
『日本語学論説資料』 CD-ROM版 41号第2分冊 2004年]
益岡隆（編）(1993)『日本語の条件表現』くろしお出版
渡辺実(1987)「比較副詞『よほど』について —副用語の異議・用法の記述の試（二）
—」『上智大学国文学紀要』4[再録 論説資料保存会（編）『国語学論説資料』24
号第2分冊]
山口堯二(2006)「副詞「よつほど」の形成」『佛教大学国語国文学会 京都国文 13』[再
録 論説資料保存会（編）(2006)『日本語学論説資料』 CD-ROM版 43号第2
分冊増刊 2006年]
Declerck, R. and S. Reed (2000) “The semantics and pragmatics of *unless*.” *English
Language and Linguistics* 4.2. Cambridge University Press.
Hopper, P.J. and E.C. Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge University
Press.

